過去をどのようにみるか

写真は2000年6月に刊行された渡辺義晴先生追悼遺稿集。366ページの遺稿集には、「その生涯と哲学」「大学・社会運動とのかかわりで」「私と渡辺義晴先生」「遺稿と対談など」「年譜と家族の言葉」が収められている。

本書の書名は、渡辺数枝夫人の発案による。「しまなみ」は、四国と本州を結ぶ海道であり、渡辺先生が晩年になってから、折に触れて、故郷の今治・松山を懐かしんだという。渡辺先生は哲学・倫理学を中心に、信州大学文理学部、教養部で教えられた。大学から地域に出て、さまざまな社会運動・住民運動にも関わってこられた。

若き青春時代、信州大の頃を思い起こすとき、この遺稿集を手にする。そこには中野和朗先生をはじめ諸先生、聞間元さんら諸先輩・旧友、そして信州の人たちの言葉が載っている。久しぶりに目を通していて、渡辺先生が1984年11月4日に書かれた文章に目がとまった。

「過去をどのようにみるか。自分史のなかの、今となっては如何（いかん）ともできない、自分の行動について、悔いる、或いは自責の感情に悩む。しかし過去というものは、現在および未来を前提にしてあるのではないか。流れ去る時間を見くびってはならない。だが、過去の「意味」は、永遠な理念にもとづいて解釈され、現実変革の現在の行為によって実現される。……　」

残念ながら、遺稿集に私の言葉を載せられなかった。「過去」を思い起こしながら、先生の思い出などを記してみたい。

渡辺義晴先生には、信州大人文学部時代にお世話になった。遺稿集の年譜によると、先生は1970年に松本市島内に家を建て転居したと書かれている。先生が転居される前、私が学部2年の頃、先生のご自宅で行われた「ドイツ語で資本論を読む会」に参加した。当時は教員宿舎にお住まいだった。先生は57歳である。

同期の島浩二くんに誘われ参加した。「無名峰」に向き合うという、彼の追悼の言葉―〝田舎の大学〟に入学した〝町衆〟の僕は、高慢にも周りの学生が幼く見えて、心満たされぬ日々を過ごしていた。1967年の春のことである。ところが渡辺先生に出会って僕の鼻柱はしたたかに折られ、先生の人格にぐんぐんと惹きつけられたのであった。

私も彼とは違った意味で、満たされぬ大学生活を送っていて、下宿に閉じこもり読書に明け暮れていた。資本論とドイツ語に興味があり、思い切って「読む会」に出向いた。先生の資本論の解説だけでなく、何気ない先生の言葉に惹きつけられていった。先生と出会わなければ、味気ない信州松本での大学生活に終わっていただろう。研究者への道を目指すこともなかっただろう。渡辺義晴先生から、学問と生き方を学んだ。

（2021年10月20日）